1991年10月1日

日本細菌学会
関東支部ニュース
第15号

第66回日本細菌学会関東支部総会の開催に当って

総会長　中　野　昌　康
（自治医科大学教授）

11月7日（木），8日（金）に開催される第66回支部総会も近づいて参りました。プログラムが出来ましたのでお届け致します。予稿集も近日中には刷り上がる予定です。

本年度より再び昔行っていたように，春秋2回の開東支部総会にはいずれも一般演題を募集することになりました。全国総会を含めて，年3回の演題を出題することは，人数の多くない研究室にとって困難なことかと思います。しかし，情報の流れが急な現在，気軽にデータを持ち寄って，発表し，討論をする方が，思わぬヒントが得られたり，新鮮なアイディアが生じるなど，研究上のプラスとなる事も多いのではないでしょうか。勿論，完成度の高い研究成果を発表するように心掛けることも大事ですが，しかし，論文をまとめる前のプロセスとして，そのような支部総会の活用法も許されると思います。また発表の予定を持合わせておられない方々も学会の本来の在り方である研究者間の直接的な交流の為の折角の良き機会を大いに利用され，支部の活性化を計っていただけることを期待しております。

昨秋の山口総会長，今春の河野総会長はいずれも盛大で素晴しい総会を東京で開催されました。今回は趣を変え，何の特徴もない栃木県河内郡南河内町という片田舎で総会を開催させていただきます。遠くてやや不便なこのような場所で開催しますと，淋しい学会になるのではないかという心配もありますが，しかし，このような機会がなければ，私共の日常に過しております研究や教育の活動の場を会員の諸先生に知っていただくことも無いのではないかと考え，あえて御迷惑をも省みず，私共の大学の講堂を使用することに致しました。

以前，大学周辺は僻地の医師を養成するのに似つかわしいひなびた所でしたが，最近では宅地化の波が押寄せ，次第に東京への通勤圏へと組込まれつつあります。JR上野駅から鈍行で約1時間半の中途半端な距離ですが，周辺にはまだ開東平野の田園風景が沢山残っています。学会の合間のひと時を，木立の多いキャンパス周辺を散策され，晩秋の栃木路を味わっていただくのも良ろしいかと存じます。

総会第1日は一般演題で始り，Toby K. Eisenstein教授の特別講演で終ります。彼女はHost Defenses to Intracellular Pathogen（Adv. Exp. Med. Biol., 1983）やHost

Defenses and Immunomodulation to Intracellular Pathogen（Plenum Press, 1988）のeditorですし，Infect. Immun. やJ. Immunol. などに多数の論文を発表していますので，それらを通して御存じの方も多いかと思います。講演終了後に別会場で懇親会を開催致します。

第2日は一般演題，総会の他に松島綱治教授の特別講演とシンポジウムを組みました。松島博士は長年NIHでリンホカイン，特にIL－1の研究をされ，数々の素晴しい業績を上げて来られました。昨年4月より母校の金沢大へ戻られて，IL－8についての精力的な研究をされており，今回はそれについての最近の研究成果を話されます。シンポジウムは奥田教授と林教授に企画と司会をお願いしました。病原因子についての概念をまとめていただく良い機会となるでしょう。フロアの諸先生からの積極的な発言を期待しております。

学会の翌日は週末です。お急ぎの御用のない方は，日光や那須の国立公園を訪れられるもよし，紅葉の益子の里を掘出物の陶器を求めて散策されるもよし，あるいは栃木市の古い町並に江戸の面影を偲ばれるもよし，さらに古きを尋ねて，足利市の栗田美術館で伊万里，鍋島の名陶を眺め，ばん阿寺や足利学校，NHK大河ドラマ足利尊氏のロケのセットを見て鎌倉時代に思いを馳せられるのもよろしいかと存じます。諸先生の御参加をお待ちしております。

平成4－6年期日本細菌学会関東支部評議員選挙を終えて

選挙管理委員会委員長　五十嵐　英　夫

次期関東支部評議員選挙のための選挙管理委員会（五十嵐英夫，池田達夫，岡村　登，笹川千尋，島村忠勝）は下記の予定に基づき平成3年6月20日から7月26日まで活動しました。

6月20日（木）：有権者名簿に関する異議申し立て締め切り（必着）。
6月22日（土）：異議申し立ての審議。
7月1日（月）：投票用紙並びに訂正名簿の発送。
7月15日（月）：投票締め切り（消印有効）。
7月20日（土）：開票，結果を支部長に報告。
7月26日（火）：当選通知発送。

今回の選挙では，投票用紙発送総数1,435通，うち受取不明で返送されたもの3通，したがって1,432通が有権者に配布されました。総投票数は574通で，投票率40.1％と前回（27.6％）及び前々回（36.6％）に比べて高率でした。

有効投票数は574通で，開票の結果は有効票：569票，白票：3票，無効票：2票でした。尚，締切後に到着した投票数は5通でした。

開票得票の結果では，87名の方が得票し，新井俊彦（明治薬大），池田達夫（帝京大・医），五十嵐英夫（都衛研），井上松久（北里大・医），岡村　登（東京医歯大・医），奥田克爾（東京歯大），金森政人（杏林大・保健），黒坂公生（慈恵医大），河野　恵（東京薬大），島田俊雄（予研・細菌），島村忠勝（昭和大・医），檀原宏文（北研），鶴　純明（防衛医大），光岡知足（日本獣医大）（以上五十音順）の14氏が当選されました。先生方にはご苦労をおかけしますが，平成4－6年期の日本細菌学会関東支部評議員としてご活躍下さいますようお願い致します。尚，得票数の第一の方は37票を，第14位の方は15票を獲得され，1票だけ獲得された方々は46人にもおよびました。

今回は徳永　徹支部長のもとに評議員会で関東支部の活性化について活発に論議され，活性化の一つの方策として支部評議員の定数を増やすことであるとの結論の基に「日本細菌学会関東支部会則」及び「選挙細則」を改訂した後の選挙であり，投票率がどのようになるか大変心配でした。しかし，投票率は前回（27.6％）及び前々回（36.6％）を上回る40.1％でした。特に，今回は前期の光岡知足選挙管理委員会委員長からの申し送り事項を参考に，投票締切日を消印有効とし，投票締切日と開票日の間を5日間に改善した。その結果，投票締切日後に到着したのは，わずかに5通

のみでした。

今回の高い投票率は，上記のような改善と関東支部の活性化に強く関心を示して頂いた会員皆様のご協力によるものと思っております。本当に有難うございました。今後とも活発な関東支部会に育てて行くため，ご協力をお願い致します。

終わりに，本選挙に当たっては，国立予防衛生研究所・細菌部の中村明子，島田俊雄，糸井エミ子，財津法子，坂口綾子の諸先生に支部事務局として，また山本　実会員（予研・細菌）には開票当日立会人として，大変お世話になりました。ここに厚く御礼申し上げます。

フォーラム

『今期（平成１～３年期）に始まった関東支部の活性化を回顧して』

城西大学薬学部微生物学
久恒和仁

学問する人間集団としての日本細菌学会関東支部の最大・最重要の具体的活動は，勿論，年２回（初夏と秋）の関東支部総会である。今期の直前まで，この初夏の支部総会は一般演題を募集せずにシンポジウムのみの１日の会期，秋のそれはシンポジウムの他に一般演題も募集する２日間の会期という方式が行われて来た。初夏の支部総会がシンポジウムのみというのは，支部総会を開くに必要な数の発表演題が集まらないというのがその理由である。ついには，関東支部評議委員会で，いっそのこと初夏の支部総会はやめて秋の１回だけにしてはどうか，という意見さえ一部に出はじめるほどの情けない憂慮すべき状態にまで行きついてしまった（この事態については本年６月12，13日の第65回関東支部総会・懇親会冒頭の徳永徹・現関東支部長が挨拶の一部で触れられている）。まさに，学会のあり方としては行きつくところまで行きついた感ありというべきである。私は，関東支部評議員としては前期（昭和60～62年期）と今期（指名評議員）の２期を務めさせてもらったが，同評議員会の中には１期３年の評議員を連続して４期も５期もされているような方々もおられるような様子で，最初の１期は何かと遠慮気味に評議員会の様子を見守っていた。しかし，関東支部は，事実として日本細菌学会３千有余の総会員のうち約半数を占める1,600名を越す会員を擁する日本細菌学会最大の支部である。この関東支部がこのままでいいのか，このままでは若い人達を細菌学会にひきつける魅力を失ってしまうのではないか，今までのマンネリ化した古い殻を破って，何とか支部活動を活性化する新しい道を見出さねばならぬのではないか，この関東支部の活性化なしには，ひいては日本細菌学会の活性化も不可能ではないか ― 関東支部評議員会の一部を除いて可成りの部分の人達（とくに年令的には中堅層と比較的若い人達）が関東支部のあり方と将来について，こうした大きな危機感を持つに至ったのは当然であるというべきであろう。

関東支部活性化のための具体的な活動は，今期（平成１～３年期）評議委員会の発足と同時に始まった。同委員会におけるこの活性化の路線が，徳永支部長のこの問題に対する前向きで進歩的な方向性によって大いに支えられたことは言うまでもない。支部活性化の目標は，第１に年２回の関東支部総会の活性化，第２に支部活性化の達成のための支部評議員会そのものの改革，の２点にしぼられた。その結果，支部総会については，(1)初夏と秋の２回の支部総会では，ともに一般演題を募集し，さらにシンポジウムを行う。(2)支部総会の活性化とは，とりも直さず発表演題数の飛躍的な増加を促進することである。この問題については「４月の細菌学会総会の限られた時間に発表したものでも，これを違った視点から発表しても構わないことにし，関連分野の支部会員相互の活発な討論を促す」という

方針が採択された。(3)支部総会における具体的な運営については総会長の自主性，主体性が尊重されるべきであるが，今まで支部総会では試みられなかったポスター形式による一般演題発表の方式を組入れることを推進する。また，第2の支部評議委員会の改革については，(1)評議員の任期を1期3年は従来通りであるが連続2期までとし，連続3期の被選挙権を認めない。(2)現行の評議員の定数（選挙により選出されるもの10名，支部長の指名評議員5名まで）を選挙により選出されるもの14名，支部長の指名評議員7名まで，と改定するなどの新方針が打ち出された。これら新方針の成果は，早くも今期のうちに関東支部活動における活性化となって齎らされた（紙面の都合で詳述できないのは誠に残念である）。先ず第64回支部総会(山口英世総会長)において，支部としては恐らく初めてポスター形式による一般演題の発表が行われた。寄せられた多数の演題とその卓抜なアイデアと見事な会の組織・運営は，活性化路線のさい先きよい出発を飾るものとなった。さらに，この夏の第65回支部総会(河野恵総会長)においてもこのポスター形式による多数の一般演題の発表が行われ，「PCR法はどこまで利用できるか」と「微生物とバイオサイエンス／バイオテクノロジー」というこれまた卓抜で時機を得たアイデアによる2つのシンポジウムでは，恐らく初めてのことと思われるが，野口英世記念会館の大講堂は聴衆が溢れて中に入れないほどの盛会となった。

今期の支部評議委員会で始まった関東支部の活性化が，その目的を勿論すべて達成したわけではない。まだまだやらねばならぬことが残っている。今後とも，この活性化の路線が評議委員会において継承・維持され，さらに発展・強化されることが好ましいと信ずる。今後の支部評議委員会の皆さんが，日本細菌学会とその会員のほぼ半数をかかえるわが関東支部とが，来るべき21世紀に学会として真に生き残れるにはどうしたらよいか，を常に厳しく自らに問いながら，ますます努力され前進されんことを心から希望してやまない。

『薬剤耐性菌シンポジウム20周年所感』

群大医学部薬剤耐性菌実験施設長
橋　本　　一

薬剤耐性菌シンポジウムと銘打って毎年8月末に前橋周辺で会を開いて今年で20周年になる。1972年に会を始めたのは今群大名誉教授三橋進先生で，10周年目には3度目の国際学会を東京で開き，ノーベル賞受賞者アーバー博士もスイスから来られたし，ウイスコンシンのラウンド博士らも来てメンバーの国際交流を深めるよい機会であった。

1983年に三橋教授が退官されてからは私が代表世話人を引き受け，場所も赤城，榛名から草津にまで年々変えて20周年に至った。今年を以て私は退官となり，その上に今まで群大の薬剤耐性菌実験施設の実際の運営責任者であった井上助教授が北里大学医学部微生物学の教授に栄転と相成った。従って今年の薬剤シンポは色々な意味で記念すべき年に当たったわけである。当然自然に記念事業をと考えたわけであるが，私はやはり学問的に意義のある会にしたいと思い，現在の日本における薬剤耐性研究を総括した個性的な記念出版をしたいと考えるに至った。現代のように専門分野が多極化すると，全ての領域に亘る総説書きは困難であり，医学雑誌の多くの特集や多くの単行本は分担執筆である。その際編集者は誰に執筆依頼をするかというのが最大課題であり，依頼枚数が決まれば後は執筆内容は全て著者一任ということになる。それでは本全体としてのまとまりがないし，個性的なものが出来そうもない。

そこで私は，著者と読者と編集者がよく話し合った末の本ということを考えた。それに対し薬耐シンポが丁度よい機会だと考えたのである。

従来学会の発表内容を元にプロシーディングズを作ることはよく行われ，私もその編集に当たったこともある。しかしはじめから本作りを目的としてその為のシンポジウムというのはなかった。薬剤耐性という本の各章に当たる内容を誰に書いて戴くか，現場で着実に仕事をしながら，その領域については最も

よく識っている方を著者に選び，同時にシンポジストになって戴くというのが私の着想だった。幸い全ての方々の諒承を得ることが出来，学会前日シンポジストの方々に集まって貰い，1時間ほど編集会議を持った。学会での活発な討論を読者からの要求としてそれに基づいて改めて編集者が著述内容をお願いし，著者と大略の方針を討論する。著者の方も専門項目が同一なときは（例えばβラクタム耐性）その小グループの代表を決め代表の方がグループ内の細項目を討論し合って分担執筆を総括し，序論，要約，文献をつける。文献は掲載順ということまで話が決まった。

20周年記念薬耐シンポは伊香保温泉観山荘貸し切りで行われたが近来にない参加人数で，これもシンポジストの錚々たる顔ぶれのせいであった。浴衣がけのくつろいだ懇親会，その後の2次会などで若い人達の気炎もあがり，泊まり掛けならではのくつろいだ雰囲気であった。

しかし何よりも会場で人々の好奇心が充分に満足できたのが幸いである。つづく討論のため時間は大幅に延長した。2日目など，コーヒーブレイクを割愛し，3時間半もぎっしり詰まった聴衆が動かずに過ごしたことなど，今までに例のない盛会であった。

しかし，最も大切な仕事はこれからである。編集者としての私が誰よりも勉強しないといい本は出来ないであろう。やり甲斐のある仕事を与えられた縁を思い私の最後の義務に力を尽くしたい心境である。

『日本細菌学会と日本学会事務センター』

(財)日本学会事務センター
荒　井　教　夫

日本細菌学会と小センターはセンター設立当初からのおつきあいをさせていただいております。小センターでは現在約200学会の事務のお手伝いをさせていただいておりますが，これも日本細菌学会によって，学会事務のKnow Howを吸収させていただいたためと言っても過言ではありません。おかげ様で昨年には大阪にも事務所を設立することも出来ましたし，より迅速な事務処理をするべく，コンピューターシステムの改善にも力を入れております。

学会事務センターと一口に申しましても7つのブロックに分かれております。先生方との窓口の業務をしておりますのが学会業務，住所変更，入会，退会あるいは月末の会員異動リストを作成しておりますのが会員業務，学会誌のバックナンバーなどを取扱っている事業部，国外の会員の窓口としての海外部，会員からの会費入金状況を報告し，学会の出納事務をしておりますのが会計，学術集会，研究発表会などの運営をお手伝いする大会業務，そして表面には出てまいりませんが，最も重要な役割を担っておりますコンピューターシステム部によって運営されております。

すっかり学会事務センターの宣伝文章になってしまいましたが，今後の学会事務センターがより学会のお力になれるよう日本細菌学会会員の皆様の御指導をお願いするとともに日本細菌学会のますますの発展を心より御祈念申し上げる次第です。

なお，最後にこのような稚拙な文章を掲載していただく機会を与えて下さいました日本細菌学会関東支部ニュース編集委員の先生方に深く感謝しております。

議　事　録

●第10回評議員会

日時：平成3年6月11日(火) 12時～13時

場所：野口記念会館

出席者：新井俊彦，五十嵐英夫，池田達夫，金森政人，川上正也，河野　恵，北野繁雄，笹川千尋，島村忠勝，久恒和仁，三上　亮，松浦基博(第66回支部総会長代理)，徳永徹(支部長)，島田俊雄，中村明子(幹事)。

欠席者：岡村　登，高橋昌巳，鶴　純明，光岡知足。

議題：

1. 第66回支部総会準備状況報告。

松浦助教授(自治医大)より準備状況につい

て説明がなされた(別紙)。

・開催日：平成3年11月7日(木)，8日(金)

・会場：自治医科大学地域医療情報研修センター

・内容：特別講演：

① T. K. Eisenstein 教授(テンプル大)；Host－defense mechanisms against bacterial infection

② 松島綱治教授(金沢大)；新しい白血球走化性サイトカインIL8の生物学的・臨床的意義。

シンポジウム：「微生物の何を病原性因子とするか？」

司会：奥田研爾教授(横浜市大)，
林　英生教授(筑波大)

・一般演題はすべて口頭発表とし，1題12分(含討論時間)の予定

・参加費等：参 加 費：一般3,000円
学生1,000円
懇親会費：3,000円

紗録集：予約価一部800円(含送料)，
当日価1,000円

2. 評議員選挙管理委員会準備状況報告

五十嵐委員長より選挙管理委員会準備状況および今後の日程についての報告がなされた(別紙)。なお，現在選挙積立金として45万円が用意されているが，消費税等の諸条件によって選挙関係費用の不足が予想される。この件に関しては，予備費で補塡すること，またさらに不足する場合には繰越金をあてることが本評議員会で承認された。

3. 会計監査選出の件

出席した全評議員の推薦により，笹川および五十嵐両評議員が会計監査に選出された。

4. 支部ニュース小委員会報告

支部ニュース15号は10月上旬発送予定。原稿締切は8月末日。内容は第66回中野支部総会長の挨拶，評議員選挙結果のお知らせ，フォーラム欄，ミニニュース，研究会発表，議事録等。16号は新支部長の挨拶。小委員会活動報告等を予定している。

5. その他

前回の評議員会において第67回および第68回支部総会長に島村教授(昭大・医)および金ケ崎教授(東大・医科研)が推薦され，徳永支部長が交渉の結果，両氏とも受諾された旨の報告があった。

◇編集後記◇ ……

◎比較的若い人たちで支部ニュースの編集を初めて，はや3年目を迎え，この15号が私達の最後の編集誌となりました。当初，編集会議での新しい編集方針や企画案がどこまで継続して紙面に出せるのか，会員の方々に参加していただけるか，など危惧していました。しかし，振り返ってその編集内容を一覧してみますと，支部評議員や会員の方々の支部発展への熱意には目を見張るものがあります。ただ，残念なのは若い会員の方からの意見が少なかったことです。今後さらにその熱意が増すことを願いたい(S. T.)。

◎平成元年からスタートしたわれわれ委員会による支部ニュース編集もそろそろ終わりになりました。当初期待した会員からの積極的な投稿は少なかったですが，多くの会員の協力によりいろいろな記事を掲載することができました。この支部ニュースが会員同士のなお一層のコミュニケーションの場となるよう，次の支部ニュース委員会の活躍を期待します(N. O.)。

日本細菌学会
関東支部ニュース
第15号
(1991. 10. 1)

発行：日本細菌学会関東支部
〒141 東京都品川区上大崎2－10－35
国立予防衛生研究所
☎03－3444－2181